

地域から
未来をつくる
人をつくる



～グローバルに活躍するサーバント・リーダーの育成を目指して～



SUIJI Service Learning Program





愛媛大学長
柳澤 康信

このセミナーの題材であるSUIJIサービスマーケティング・プログラムを運営するSUIJIコンソーシアムは、平成23年に愛媛大学、香川大学、高知大学とインドネシア共和国の3大学とで組織され、今日のセミナーの開催場所である愛媛大学南加記念ホールで第一回目のシンポジウムを開催しました。そういった意味で、ここはSUIJIのスタートの場所であると言えます。

このプログラムで目指しているのは、組織の構成員を支えながら目標達成に導くことのできる奉仕型の「サーバント・リーダーシップ」を持った人材の育成です。学生たちには社会に出たときにサーバント・リーダーシップを発揮できるよう、その能力を大学にいる間に身につけて欲しいと強く願っています。

愛媛大学は地域の中核大学として、地域の持続的発展に責任を持つという気概を持ち、これからも様々な研究・教育活動を実施していきます。地域との関わり方を考える時、大学としても個々の学生としても、決してローカルに閉じるのではなく、一人の人としてローカルに立脚しながらも、世界を見る視点を持つ必要があると考えています。

このセミナーの「地域から未来をつくる人をつくる」というテーマは、愛媛大学全体の人材育成のキーワードでもあります。今日は、パネリストの皆さまから、豊富な知識と経験に基づいた話題提供やコメントを頂戴できることを楽しみにしています。またグローバルとローカル、愛媛大学においてはグローバルマインドを持った人材、これらの関係性を議論の中で深めていただけることを期待しています。



地域から未来をつくる人をつくる

～グローバルに活躍するサーバント・リーダーの育成を目指して～

SUIJIサービスマーケティング・プログラムは日本・インドネシア6大学の連携の下、両国の学生が両国の農山漁村に滞在し、その地域が直面する課題に取り組みながら学ぶプログラムです。グローバルな視点とつながりを生かしながらも、地域の資源や知恵に光をあて、ローカルを足場としてより確かな未来を創ろうとするグローバルに活躍するサーバント・リーダーの育成を目指す先駆的な取り組みです。

本書は、2015年1月16日に開催した公開セミナーの内容を中心にSUIJIサービスマーケティング・プログラムの取り組みと成果をまとめたものです。



プログラムの目的と枠組み

SUIJIサービスマスターニング・プログラム
目的と枠組み愛媛大学 SUIJI 推進室
准教授
島上 宗子

私は毎年、夏に3週間と冬に3週間、学生と一緒に地域に行くのが主な仕事となっています。これは日本とインドネシアの6大学のコンソーシアムによるプログラムで、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」の補助金の交付を5年間受け実施しているものです。学士課程のプログラムでは、6大学の学生が2〜3週間、共に農山漁村に滞在して、現実の中でもみくちやにされながら学んでいきます。学生が地域に立脚し、未来社会の持続的発展に貢献できる国際的なサーバント・リーダーになることを目指しています。

1回生から4回生、全学部の学生が受講できるプログラムで、愛媛大学では共通教育科目の発展科目に位置づけられています。講義形式で開講される地

域未来創成入門」を受けた後、国内と海外にてサービスマスターニングという実習形式の授業を繰り返していきます。「国内サービスマスターニング」は、毎年夏休みの8月から9月にかけて約20日間、四国の農山漁村に入って活動します。春休みの2月から3月にかけて、インドネシアに行って約20日間活動するのが「海外サービスマスターニング」です。サービスマスターニングは段階的になっており、まずベーシック・レベルという基礎力を養うサービスマスターニングがあります。その後、もう少し掘りみたい、もう一度地域に行きたいという人は、アドバンスド・レベルという、さらにリーダーシップを発揮して活動するサービスマスターニングに続いていきます。

サービスマスターニングは、理想的には、地域に貢献しながら学ぶという説明になりますが、実際にやっていることは、学生が地域に身を置くことで、地域の凄さに驚いたり、現実を実感しながら、どんな未来を創りたいのか、自分たちは何ができるのかを真剣に考え、たとえ細やかでもできることを試みながら、地域の現場で学んでいくことです。実際には、大学、あるいは学生から地域に何かサービスマスターニングという方向ではなく、地域の方々に私たちが受け入れていただいている、地域からサービスマスターニングを受けるほうが大きいかもしれません。学びにも双

方向性があって、基本的には学生が学ぶのですが、もしかしたらインドネシアの学生、日本の学生が地域に行くことで、地域の方も何かをちょっとでも感じていただけて、新たな風が吹いてきて、それが微かな学びになっていければ本当に素晴らしいなと私たちは思っています。

若者が農村に行き、何ができるか試してみようという形の農村実習はこれまでもたくさんありました。SUIJIのサービスマスターニングは、インドネシアと日本の学生が両国の地域と一緒に入っていくところに特徴があります。インドネシアの学生たちは、インドネシア人としての見方やインドネシアでの経験をもとに、日本の地域を見たり聞いたりするわけです。日本の学生は、インドネシアの学生と一緒に入るので、自分自身が地域に入っている驚きもありますが、「なんでこうなっているの?」「日本はなぜこうなの?」「なんで村には若い人が全然いないの?」というインドネシア人の驚きに対して、なんとかして英語で説明をしなければなりません。日本の学生は、地域の方々の現実と日本の現実とインドネシアとの橋渡しをしないと行けない。この作業の中で、自分の視点であるとか、自分の価値観が相対化されていきます。実践する中で、地域に学び、異文化に学ぶというプロセスが生まれていきます。インドネシアでも大学生による農村実習には非常に長い伝統があるのですが、インドネシアの学生がただ単に農村に実習に行くだけではなく、あるいは日本の学生がスタディツアーのようにインドネシアの村に行くだけではなく、日本とインドネシアの学生と一緒に地域に入っていくことで、同じような学びのプロセスが生まれています。



具体的な実施概要を最近の例で説明します。平成26年8月には、日本とインドネシアの6大学の学生約110名が愛媛にまず集結。オリエンテーションに参加して四国の農山漁村8つのサイト(実習地)に分かれ、約20日間活動しました。インドネシアの場合

も同様に、日本とインドネシアの学生約120名が5つのサイトに分かれて活動しました。どんな活動をするのかについては、日本とインドネシアで共通しているのは、その地域をまずよく知るために歩く、見る、聞く活動を行い、驚いたことや面白いと思ったことをマップに落とし込む作業を行います。地域に滞在するのはわずか10日間あまりです。その中で何が出来るかをインドネシアと日本の学生が議論しながら決めていきます。活動の中には、地域の日常生活を体験しながら学ぶものや、地域にあるものと自分たちが持っているものとを組み合わせ、何かできることはないか、探求する活動もあります。最後に、滞在中に学んだことを、地域やお世話になった大学で必ず成果発表してから帰ることを義務づけています。

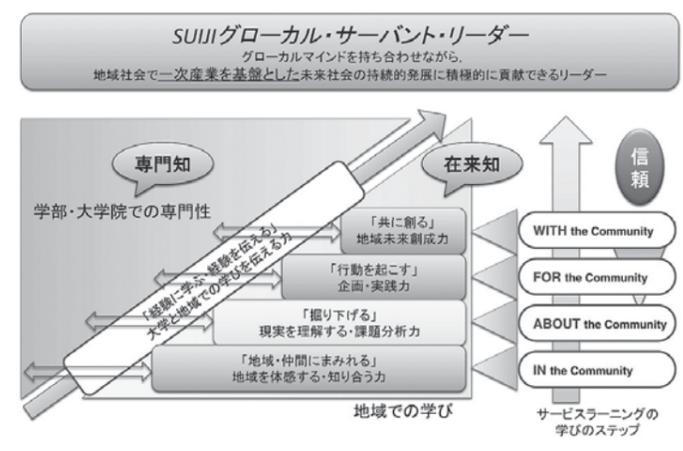
学生たちが計画して実施する活動は、サイトにより様々ですが、側溝の掃除や、地域カフェの開店などが挙げられます。インドネシアでは深刻化してい

るゴミ問題に取り組むサイトが多くみられます。活動を企画するには、英語でなんとかして意思疎通を図らなければならないため、実習中の3分の1ほどは議論をしているのではないかと思います。また、インドネシアでは学生たちはホームステイが基本になります。日本の学生にとっては、トイレやお風呂の違いに驚きながら、人々の暮らしを体感する貴重な機会となっています。

活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。

活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。活動に参加する学生たちは、イマドキの学生です。

新SUIJIグローバル・サーバント・リーダーの力



す。プログラムを進める中で、様々な方々にお世話になり、具体的にお顔が繋がってきました。今回のセミナーを実施する際にも、様々なマスメディアのご協力を得ました。愛媛・インドネシア友好協会にもご協賛いただきました。今後、民間企業、NPO、NGO、地元行政の方々を含め、さらに強いリンクができていくと、本当に地域から未来をつくる人材育成に向けて、よりよいプログラムができるのではないかと考えています。



インドネシアの農山漁村で実施する 海外サービスマーケティング

四国の農山漁村で実施する 国内サービスマーケティング

How to 分別!



ホームステイ!



これが日本の
“おにぎり”だよ!

インドネシア
伝統の音♪



インドネシアの
子どもたちと一緒に
折り紙!



インドネシアの
ローカルにまみれる!



SUIJI

SIX-UNIVERSITY INITIATIVE
JAPAN INDONESIA

地域にまみれる!!

— 学生たちの活動のようす —

地域の方と一緒に
初めてのもちつき!



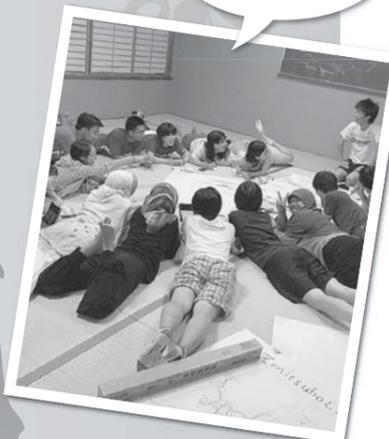
愛南町での
実習中のすみか!



地域の
盆おどりに参加!



深夜におよぶ
ミーティング!



暮らしぶりを
教えて!



やってみてから
考えよう! 稲刈り!



インドネシアンカフェ
オープン!



学生のまなび

第二の故郷ができる授業



愛媛大学法文学部 人文学部
観光まちづくりコース 2年生
菊川 愛理さん

で車から降ろされて、「昼ごろ迎えにくるから」と言われ、途方に暮れたのを覚えています。そこから地域を知るための、地域の方からの聞き取り調査等のフィールドワークが始まりました。

1年目を終えての感想は、地域の方との交流活動や地域を知ろうとするフィールドワークだけで手一杯で、課題解決につながるような自主的活動をする余裕がなかったように思います。

私はSUIJIサービスマーケティング・プログラム（以下、SUIJI-SLP）の実習に3度、参加しています。1回生の時にはベーシック・レベルとして日本とインドネシアの各実習地へ、2回生の時にアドバンスド・レベルとして再び日本の実習地へ行きました。日本の実習地は愛媛県西予市明浜町、インドネシアの実習地はジャワ島の中部にあるLegalという地域です。今日は1回生、2回生の2度に亘りお世話になった愛媛県西予市明浜町での活動内容をお話しします。

西予市は、人口約3600人。柑橘栽培、チリメン漁、真珠養殖業などが盛んな地域です。日本国内での実習は8月中旬〜9月上旬の3週間に亘り活動します。1回生の時、参加した活動の初日、突然何もない道路端にインドネシアの女子学生と2人

共に関心旺盛で積極的です。日本では当たり前のことも、インドネシア学生にとっては全てが新鮮なよ効でした。

共に活動するインドネシア学生からも多くの刺激や新しい発見を得ました。インドネシア学生はとても好奇心旺盛で積極的です。日本では当たり前のことも、インドネシア学生にとっては全てが新鮮なよ効でした。



平成25年海外サービスマーケティングにて、インドネシアの小学生たちと

いや河川、古民家の清掃等、若い人手が足りないために今まで手が付けられていなかった作業のお手伝いをしました。

こうした2年間の活動の中でたくさん地域の方に支えていただきました。食材を差し入れていただいたり、魚のさばき方を教えていただきました。やりたい活動について話し合っているとそれを聞いた地元のお母さんから人を紹介していただいたりもしました。この他にも本当にたくさんの方々に協力いただきました。

そんな素敵な明浜にもやはり地域の課題があります。日本中の農山漁村地域でもよく見られる高齢化、人口減少、少子化、空き家の増加などたくさん問題があります。こうした問題を解決したいという想いから、自分たちのアイデアを出し合いました。いっぱい考えて、いっぱい地域のことを知ろうと活動しました。

でもはたと気づきました。私達にはそれらのアイデアに対して責任がありません。私達は地域外に住む学生ですし、実際に動くのは地域の人になってしまいます。でも、明浜のため、そこに住む人たちのために何か出来ることをしたいという気持ちは確かにあります。

そこで、地域に住んでいない私たちでも今後、地域のために動けることは何だろうと考えました。

そして実際に動き始めた活動があります。まずは、複数人のグループ間で短い文章のやりとりができるLINEという携帯電話のアプリを活用し、地域の小学校高学年から高校生と我々大学生とでグ



もに肥料やり、ため池の清掃、そして収穫といった活動を行いました。そうした活動の中で何より嬉しいのは、地域の方が気さくに声を掛けてくださることでした。

2回生での活動には、私はアドバンスド・レベルとして参加しました。まずはテーマを参加学生間で話し合いました。「1年目は地域の方にお世話になりっぱなしだったから、2年目は何かこちらから能動的に活動したい。そのためには信頼関係が必要だ。交流を深めて信頼関係を築こう」ということからテーマは「交流」と決まりました。少しでも何かお役に立ちたいという思いから、農作業のお手伝

ループを作りました。そこで、数学や英語などの宿題で分からない問題があるという地域の子どもたちからの相談に対して、私たちが家庭教師のように指導・アドバイスするといったものです。そのグループにはもちろんインドネシア学生も入っており、英語で日記を書いたり閲覧もしています。また、地域には若い働き手が少ないと聞き、みかんの収穫のお手伝いにも行っています。これらの活動を通じて、地域に寄り添った活動を「継続すること」こそが大事だと学びました。

また、私たちが「よそのもの」であることにも価値があると考えています。

日本の実習地で日本学生は、地域の事情や人間関係が分かかってしまうからこそ「こんなアイデアは無謀な提案なのでは？」と尻込みしてしまう場面もあります。しかし、インドネシアの実習地では、インドネシア学生には見えない新しい視点から、ある意味「よそのもの」ならではの無謀な提案ができてしまうという強みがあります。

私自身はこれまでの活動を通して、エコトリスムに関する研究を深めるためにインドネシアへ留学をしたいと考えているようになりました。

しかし、私にとって第二のふるさととは明浜です。いつもあなたかく迎え入れてくれて、居場所をつくってってくれて、とても心地のいい場所です。「またおいで」と言ってくれる人がいます。いつか、明浜のために何かしたい、何かできる人になりたいと思っています。だから私はこれからも、明浜に関わり続けていきたいと思っています。



地域のまなび



西予市役所 明浜支所
総務課 地域係長
木崎 真近氏

西予市明浜支所総務課で地域係長としております、木崎真近と申します。主に地域づくりを担当しており、その中で出会ったのがSUIJIでありまして、非常に自身のめりこんでいます。今日は地域側からの考え方、また想いなどを含めお話をさせていただきたいと思っております。

このたび、SUIJIサービスマスターリング・プログラムで来ていただいたのは明浜町の渡江地区という地域です。、世帯数77戸、222人の小さな集落で、高齢化率は40%です。しかし、2歳から101歳のお年寄りまで概ね各年代に各2〜3人が分布しており、小集落ならではの横のつながりの強さ、まとまりのよさがある土地柄だと思います。

2年目を迎えるSUIJI、昨平成25年のテーマは「地域を知る」でした。まず最初に印象

に残っていたのは、学生たちが盛んに「海がきれい」と口にしていました。その光景を見て、純粋に田舎の良さについて教えたいと欲しく感じました。そして、まずは地域を知って欲しいと思い、学生を2〜3人ずつ地域に2日間放り出しました。見ず知らずの地で学生がゼロから物事、人文化を触れたことがその後の大きな礎になったと思います。滞り期間の中盤から後半にかけては、日本人、インドネシア人、また地域の住民が溶け合っており、身振り手振り、カタコトの英語、渡江弁を交えながら交流が図られていました。

2年目の平成26年のテーマは「交流」でした。アドバンスドの学生がリーダーシップを発揮し、研修前からテーマ、具体的活動等を提示してくれていました。またベーシックの学生もアドバンスドの学生に真摯に従い、1年目と比べ非常に成果のある活動になりました。

私は、SUIJIを通して、学生がいかに地域に貢献しているか、大学が地域に根ざして活動に取り組まれているかを広く知っていただきたいと強く思います。ありがたいことに、渡江地区の住民からは、来年以降も「もちろん来てよ、来年も再来年も」というお話をいただいています。

SUIJIの学生からは、様々なアイデアが出てきます。しかし、この過疎地域が一発逆転するようなものはありません。それは私どもも、地域も分かっております。

しかし、お願いがあります。これからも引き続きいらしてください。実は実習で訪れた学生たち、

通年渡江を訪ね、何か役に立ちたいとみかんの収穫を手伝ったり、家庭教師役を買って出てくれています。さらに若者の情報発信力は強力なものがあります。外部からの発想も含め、SNS等で田舎の良さを感じたままに発信していただければ嬉しいですね。

最後に、SUIJIがきっかけとなり、この地区で誕生したものがありません。他地域のブランドに押されて消費が低迷している地域のおいしいみかん、これを何とかできないかと昨年の活動で学生たちが話し合いました。それをきっかけに地域内で話し合い、平成26年度、総務省の過疎地域等活性化推進事業（スマイルビジネス）に応募したところ採択され、現在地域で組織を立ち上げ、計画を進行しています。これを愛媛県営業者のお墨付きもいただき、明浜町渡江発、「冷凍みかん」として売り出す予定です。この事業は、生産段階で地元高齢者の雇用も生み出します。これこそSUIJIの学生さんたちのアイデアから形となったものであると私たちは捉えております。若者のアイデア、よそ者のアイデアをいただくことは、非常に有効なことなのです。

この過疎の町、明浜町、中でも渡江地区は集落機能が今維持できないという状況にまで陥っていますが、SUIJI事業、滞在される学生たちから、多くの元気、勇気をいただいています。今後ぜひお越しく下さい。我々とともに、愛媛県の地方、一集落の存続に向けて、共に活動していただければ幸いです。



愛媛大学 SUIJI 推進室
地域から 未来をつくる 人をつくる

～グローバルに活躍するサバント・リーダーの育成を目指して～

教員のまなび



愛媛大学国際連携推進機構
国際教育支援センター 教授
Vergin Ruth

私が、過去5年間引率したサービスマスターリング・プログラムでは、開始時に学生がお互いの意思疎通を図ることに苦労していました。ところが終了間際には、語学力の向上はさほど見られないにも関わらず、彼らは様々な工夫を凝らして意思疎通できるようになりま。地域での滞在中、地域は学びの場、遊び場、そして寝食の場として徐々に学生にとっての故郷になっていきます。その間に、彼らは他の学生と共に地域で活動するために、毎日少しずつ、時には大変な苦勞をしながら地域の作法に自分を合わせる術を身につけていきます。

地域の人も徐々に、訪ねてきた学生に慣れていきます。学生たちが訪ねてきた理由に興味を持つ人、学生と積極的に関わりプログラムの運営に携わる人も生まれます。私は、一ヶ所に多様な人々が集うことで、「何か」が起こるのだと考えています。

専門知識と人生経験が十分に備わっていない学生は、効果の薄いプロジェクトしか実行できません。しかし、彼らが地域に貢献しようとする姿勢こそが、彼ら自身の活動をより意味あるものにしていきます。プログラムの中で、多種多様な学びが展開されるという仕組みが、彼らに非常に強力な学びの場を提供しているのです。

学生はプログラム中に遅くなりません。学生同士やサイトの人々とコミュニケーションを取り、自分の考えを伝えようと、動くこととする姿勢を持ち始めます。わずかな変化ですが、それが積み重ねられ、フィードバックを迎える頃には少し成長しています。

本当の意味での成長は、サイトを離れてからかもしません。プログラムが終了して数ヶ月ぶりに学生と出会う、サイトを再訪する時、さらに力をつけていることに驚かされます。プログラム期間に芽生えた「何か」が、普段の生活の中で反芻され、背を伸ばして葉を広げ続けているのだと思います。

先日、高川サイトの学生有志と現地を訪れた時のこと。地元の方々が学生達のことを、「わしの顔を見るなり駆け寄ってきて、大きい声で挨拶してくれたいよ。嬉しかったなあ。」とおっしゃっていました。また、道中で学生が顔見知りの方と出会えば長い立ち話になります。

学生達の内面に芽生え、成長している「何か」とは、まさにサバント・リーダーの力なのかもしれません。まずは人々に認められ、同じ目線で話ができる段階まで来ました。ここが第一関門で、意外と難しいところなんです。これから、その「何か」が、学生なりに実をつけてくれるのが楽しみです。



愛媛大学農学部生物資源学科農山漁村
地域マネジメント特別コース 講師
笠松 浩樹



愛媛大学 SUIJI 推進室
助教
Abidin Zaenal

プログラムの今後にとって重要なのは、参加学生間のコミュニケーションを実習終了後もいかに維持・継続させるか、ということです。

明浜サイトの学生たちが実習後に実施している「赤ペンお姉ちゃん」という活動はその試みの一つです。この活動は、SNSを通じて明浜町の子供たちに勉強を教えるもので、結果的に地域と学生の結びつきを強め、休日に学生たちがみかんの収穫の手伝いに明浜を再訪する等の活動にもつながっています。

インドネシア学生にとっては、プログラムの意義や目的がインドネシアで長年実施されてきた農村実習とは異なることを理解する機会にもなっています。また、学生たちは帰国後に地域の子供たちにゴミの捨て方や分別を教える「ゴミ学校」や、プログラムの魅力を学内外で紹介する活動に積極的に取り組んでいます。

これらの活動は、実習に参加した6大学の学生によるサテライト活動（自主的課外活動）と言えます。それは地域貢献だけでなく、仲間とアイデアを共有・議論し、協働するトレーニングの場にもなっています。プログラムでの学びをもとに、仲間と刺激しあい、自らの可能性を拓けるメディアとして、こうしたサテライト活動が増えることが大切だと考えています。



四国の田舎は 宝の山を 田舎の宝を 掘り起こせ

NPO法人えがおつなげて
代表理事

曾根原 久司氏

私は現在、山梨県の限界集落に居住しながら活動をしていきます。人口は減ってしまいましたが、元々の資源、宝は山ほどありますから、それを掘り起こし、新しい価値を付与する活動を行ってきました。今年で20年になります。4年前、「日本の田舎は宝の山」というタイトルの本を出版しました。その中で自分の活動を紹介すると同時に、もしも日本全体の農村地域で同じような仕掛けをしたら、10兆円の産業が動き出すという大胆な予測を書きました。昨年末、政府の総合戦略閣議決定で農村10兆円産業が決定したとの新聞記事が出ていて驚きました。

私の10兆円理論を愛媛に適用させて計算したところ、約1500億円のポテンシャルがあります。内

訳は、農商連携・6次産業化含む農漁業600億円、農村での観光・交流400億円、森林資源の建築・不動産200億円、自然エネルギー200億円、教育・IT・メディア・福祉等サービス分野100億円です。全体で約3000億円の既存の産業があることが見えてきますが、この産業の上に約1500億円がこれから約10年かけて伸びると考えられます。大風呂敷を広げていると思われるかもしれませんが、私の理論の根拠となっている活動をご紹介します。

私の活動拠点の一つは山梨県の増富という地域です。高齢化率62%、小学校・中学校はありません。耕作放棄率は44%です。農家ゼロ地帯に一時期的な

り、JAが撤退しました。典型的な限界集落地域です。

過疎・高齢化による耕作放棄地の増加や森林資源の荒廃、コミュニティの弱体化など、農村の課題は山ほど指摘されています。一方で、食料自給率やエネルギー自給率の低下など、都市には都市の課題が山積しています。我々は、農村と都市のそれぞれマインスの課題をかわらせてプラスに転じさせようという発想のもとに活動をしています。1×1=1になるという発想です。

いくつかの成果をご紹介します。我々のエリアは耕作放棄率20〜30年を誇る場所ばかりですから、今では立派な木が生えています。そこで、10年ほど前は都会の若者に呼びかけ、開墾ボランティアを入れました。農業を一切やったことがないような若者が1000人以上来て、3haの農地がよみがえりました。日本だけではなく、アメリカ、ドイツ、フランス、韓国など約20カ国からも来ました。2004年のデータでは、日本からの参加者は圧倒的に首都圏からです。大都会に、農村に対するニーズが非常に高いことが分かります。

その後、よみがえった農地を活用する仕組みとして、都市部の企業との連携をはじめました。狙いは、農村最大の課題である経済を再生させることです。ここにメスを入れなければ、農村の再生はおぼつかないと考えました。そこで10年前、都市部の企業と農村が連携することで、農村資源に新しい価値を生み出すための企画をつくり、今では14社の企業に限界集落で一緒に活動していただいています。代



表的な例をご紹介します。

三菱地所という大手不動産会社が2008年に我々と一緒に活動をはじめました。三菱地所の拠点である東京丸の内と限界集落をつなぐ活動です。20年以上放棄された棚田に、三菱地所のCSR(Corporate Social Responsibility)活動の一環として社員の皆さんに開墾体験バスツアーを組んで何度も来ていただきました。結果として棚田がよみがえりました。

よみがえった棚田で、酒米などを生産し、「純米酒丸の内」を開発しました。2011年より東京丸の内にある飲食店などにも販売し、毎年このお酒ができる、1〜2ヶ月で在庫がなくなるほどの人気となっております。また、このお酒ができるまで

の過程をツアー化し、東京丸の内でも働くみなさんに酒米の田植えツアーや稲刈りツアー、お酒ができたときの蔵開きツアーなどに参加いただいています。さらに近年では、三菱地所のグループ会社のマンションに住む方々に対しての農業体験ツアー等を年間を通じて行っています。どのツアーもとても人気で、多いときは定員に対し約7〜8倍の競争率となるほどです。

山梨県の間伐材利用のプロジェクトも行っています。山梨県知事、三菱地所、三菱地所ホームと山梨県産材の活用に関する三者協定を2011年に結び、三菱地所ホームの製品開発を進めました。その第一弾としてできたのが、2×4の建材です。2×4住宅の建材のほとんどは、海外から輸入されていますが、この木材の流通を通じて、間伐材も流通する仕組みができました。

この活動の主旨は「本業に生かすCSR」です。CSRは企業の社会貢献と訳されますが、社会貢献だけではなく、本業にも農村資源を生かしているというものです。結果として、耕作放棄地の開墾といった社会貢献のツアーだけでなく、自社の製品開発なども一緒に行っていたいております。

こうした我々の活動がモデルとなり、昨年、企業と農村を結びつける「1村1社運動」が霞ヶ関で発足し、さまざまな賞を受賞させていただきました。私は元々、20年前までは東京で銀行のコンサルタントをやっていました。バブル崩壊を迎え、日本経済の栄光の時代は終わりだと直感しました。そして恐らく2015年頃を境に日本は大転換するだろう

と20年前に予測しました。大転換の一つのきっかけが、農村資源への注目の高まりです。この予測は当たったと思っています。私かなぜ山梨で活動の口火を切ったかという、山梨の資源に惚れたからです。耕作放棄率第2位で、森林率も高い。日照時間も長く、太陽光発電には適地です。実際に自分の畑を切り開いたり、林業からはじめました。おそらくこうした動きが2015年以降、本番に入るだろうと思います。

ここで要となるのが、都市と農村をつなぐ存在をいかにつくるかです。その意味で、SUURIPログラムのように、若者が農村に行く、また海外とつないで行うなど、新たな知を刺激として入れて、新しい価値を生み出す取り組みは大変有効だと思っています。



開墾作業で切り株を掘りおこすツアー参加者たち





インドネシアで カカオ革命！

Darius K 株式会社
代表取締役
トレッドマーケティング
ジャパン株式会社
代表取締役
吉野 慶一氏

SUIJIIとも関係が深いインドネシアのスラウェシ島から原料のカカオを輸入し、チョコレートを製造し販売しています。現在、京都に2店舗と大阪の百貨店に1店舗あります。私は学生の頃からチョコレート屋になろうと決めていたわけではなく、つい3年半前に起業しました。その経緯を簡単に説明します。

2001年から2012年までの10年間、テロやサブプライム、リーマンショックなどで、なかなか経済は動きませんでした。しかし、カカオの価格は約3倍に上がっていました。金融アナリストをしていたとき、このことを知り、どういふことかと考えました。これまでチョコレートを消費しなかった新

興国の人々の所得が増え、消費するようになったからとまず考えました。エコノミストもそう言っていました。しかし調べていくとやらそうではない。カカオの価格はロンドンとニューヨークというカカオの生産国とは全然関係ないところで決まっていた。面白いのは、株価が下がるとカカオが上がり、株価が上がるとカカオが下がるということです。これは何を意味するかというと、政府の年金や基金を運用するときに、株価が悪いとお金を預けなければならず、商品作物への投資が高まるのです。これはカカオだけではなく、コーヒーや紅茶、小麦粉、トウモロコシ、原油なども同じです。

10年間でカカオの販売価格が3倍になったということは、カカオ農家の人たちの暮らしも3倍豊かになったのか。それを確かめるため、一時期仕事を休んでアジアをまわりました。僕は大学生のときバックパックで約60カ国をまわったのですが、そのときと状況は全く変わっていませんでした。カカオ生産者でもチョコレート業者でもなく、お金を運用する投資家が利益を得ていたのです。これは切ないと思いました。自分に何ができるか、会社を辞めて、真剣に取り組んでみようと思いました。

菊川さんは「よく知らないところで自分に何ができるんだろう」と考えたという話をされていました。まさに僕も5年前は同じ気持ちでした。金融アナリストとしての社会経験は少しありましたが、カカオ、チョコレートに関しては全く知りません。それでも自分で「一人SUIJIIプログラム」のように飛び込んでいきました。

カカオは木になっているとても大きな果物です。生産量は現在コートジボワールが世界第一位で、インドネシアは第二位、ガーナとほぼ同じの生産量を誇っています。しかし、日本はほとんどのカカオを遠いガーナから輸入しています。インドネシアから輸入したほうが楽だし、経費もかからないはず。僕は最初、ガーナのカカオはきっと品種がよく、美味しいのだろうという仮説を立てました。

インドネシアに行くと調べてみると、品種自体はガーナと同じでした。何が違うかというと、収穫後に、発酵させるかどうかでした。チョコレートは発酵食品で、美味しいチョコレートを つくるにはカカオをしました。それが自分でできることだと思っただけです。シェフでもない自分がチョコレート屋をはじめめる上でできることといえば、マーケティングや出口戦略を考えることだと考えました。SUIJIIプログラムに参加する学生さんも、自分たちで実際につくることはできなかったとしても、販路開拓などの面でアイデアを出すことができるかもしれません。

現在取り組んでいるのは、インドネシアでのチョコレート製造です。インドネシアの農家は、カカオ豆がチョコレートになることは知っていましたが、自分で育てたカカオからチョコレートをつくったことはありません。これはものすごくポテンシャルがあると思いました。どんなに技術のあるシェフのチョコレートでも材料が良くなかったら美味しくありません。つまり、材料をコントロールできる人が一番価値を生めるかもしれないということです。農家がチョコレートを つくって食べ、もっと美味しいものをつくらうと思えば、農家にしかできない世界のチョコレートをできるかもしれないと思っただけです。そこで、インドネシアの村で、機械を提供して現地の農家にやり方を教え、チョコレート製造を試みます。初めてチョコができたときは、みんな男泣きしました。

チョコレートを製造する際、カカオ豆の外側の殻が大変多く出ます。この殻を使って何かできないかと考えたのが、殻を使ったバイオ発電です。村では、チョコレートを つくるために機械の電源を入れるとすぐにブレーカーが落ちてしまいました。電力事情



才豆の発酵が不可欠ですが、インドネシアでは発酵させていなかったのです。手間をかけて発酵しても、買取価格がほとんど変わらなかったためです。

これは僕にとってすごくいい発見でした。品種は悪くないのだから、発酵さえすれば日本のチョコレート市場にも持って来られるかもしれない。とはいえ、僕の専門は文系だったので、発酵のプロセスは独学で勉強しました。また、いきなり農家に発酵してくれと言ってもできないので、これも「一人SUIJIIプログラム」で、約1ヶ月、農家にホームステイして一緒に発酵を試行錯誤していきました。

通常のチョコレート屋は製菓用のチョコレートを買って溶かしてつくりますが、Danisでは豆の品質チェックからやります。トレーサビリティもあり安全です。そして何より発酵が完璧にできているので美味しい。品質に加え、生産者が頑張ったという取り組みをストーリーとして消費者に伝える

が悪く、頻りに停電が起こるような農家では電力が足りなかったのです。そこで、カカオの殻を使ってガスを発生させ、バイオ発電する。その残渣は肥料になり、3年間待てば有機肥料としてオーガニック・カカオ、オーガニック・チョコレートにもなる。さらに余ったガス、電気は売れることもできるというモデルを考えています。ようやく今年から他の企業やメーカーと組んで実現していく予定です。技術さえ確立すれば、インドネシアだけでなく、ガーナやコートジボワールでもできます。

DanisのDanisは、インドネシア語で「どこから」という意味です。スラウェシ島がアルファベットのKの形をしているので、カカオの一大生産地である「スラウェシ島から」という意味を込めてこれまで歩んできました。今後は、「カカオから」エネルギー、バイオガスをつくるという意味も込めたいと思っています。インドネシアのいいものを、日本・京都を経由して世界に発信し、いろいろなDanisを世界中で展開していきたいと考えています。



インドネシアのカカオの木の前で





地域環境知の 視点から

総合地球環境学研究所
副所長・教授
地域環境知プロジェクト
プロジェクトリーダー
佐藤 哲氏

地域の中にある豊かな知識に学生や研究者が接する。そこで様々な相互作用が生じることによって、新しい動きや知の展開が起こる。そうした知識のあり方をずっと考えてきました。その視点から主に3点、コメントさせていただきます。

サーバント・リーダーシップの話からはじめたいと思います。奉仕するリーダー。ここで必要となる要素は「信頼」です。誰かを支えたいと思っても、相手があるを信頼していなければ成立はしない。逆に、自分が相手を信頼していなければ、相手を支えようという心は動かない。サーバント・リーダーシップの重要な基盤として、信頼する力、される力の両方をおきたいと思えます。

信頼に不可欠なのは、お互いに相手の言うことに耳を傾けることです。菊川さんが言った聞き取りは調査手法ですが、やっていることは真面目に話を聞くということだと思います。話を聞き、学ぶという姿勢がサーバント・リーダーシップの非常に重要な基盤になると思います。

地域社会に対してサーバント・リーダーシップを発揮しようというとき、関わりが短期的ではどうしようもありません。どれだけ長く関われるか。これが信頼の基盤となり、知識を有効に使うっていく基盤となります。これが一つ目のポイントです。その意味で非常に心強かったのは、菊川さんの報告の中の「第二の故郷」です。いつのまにか、渡江が第二の

故郷になり、自分のおじいちゃん、おばあちゃんの元に帰ると同じように毎年帰りたいと思うような関わり方です。こうした関わり方を大学としてどうサポートしていくか。ぜひ本気で検討していただきたいと思えます。

地域に埋没して、地域の一人として研究していくような研究スタイルを私たちは「レジリエント型研究」と呼んでいます。レジリエント型研究ではこうした関わり方が決定的に重要です。また、島上さんは地域と学生・大学の関係は実は双方向だったと説明しました。サービス（貢献）とラーニング（学び）はまさに両方とも双方向なのです。学生が地域の中に入ってサービスし、結果として学ぶという、一方の関係ではないはずなのです。それを明瞭に意識されたのは大変な進化です。

地域には、日常生活から得られる知識が大変豊かに存在し、そうした知識に触れることで、私たちのような科学者・専門家は大いに好奇心を刺激されます。それと同じことが、学生の中に起こっている。そういうプロセスが起こること、長期的な関わりを通じて信頼をつくることと密に関わってきます。

未来への展望につながる知識が地域には渦巻いています。外から入ってくる知識も含めて、いろいろな知識が相互作用を起こすことによって新しい知識・技術が創発されます。吉野さんのお話のように、カカオ豆を発酵するだけではなく、バイオエネルギーにカカオの殻を使うというような、新しい知識・技術が次から次へと創発するという現象が十分に起



こりうるのです。こうしたシステムが動いていく中で、いろいろなアクターがそれぞれの役割を果たします。SUIJIIのプログラムで地域に入る学生も教職員もアクターの一人です。もちろん地域づくりの主役は地域の方々です

が、こういったアクターが様々な形で相互作用し、協働が繰り返されることでお互いの信頼が生まれ、いくというプロセスが動くのです。

信頼には二つのあり方があります。一つは、目的と考え方が一致しているから信頼するというもの、もう一つは、立場や考え方は違っても、その違いをしっかりと理解し尊重することで生まれる信頼です。それが、木崎さんがおっしゃっていた「毎回来て欲しい」という気持ちに繋がっていると思います。つまり、学生が直接役に立っているわけではないかもしれませんが、来てくれるとうれしい。そういう仕組み、心が生まれていくのです。

ここで少し、私たちが考えている知識体系の話させていただけます。私たち科学者は、普通は自分の好奇心だけで動いていくのですが、そうではなく、現実の課題に対応して生み出され、問題の解決に近

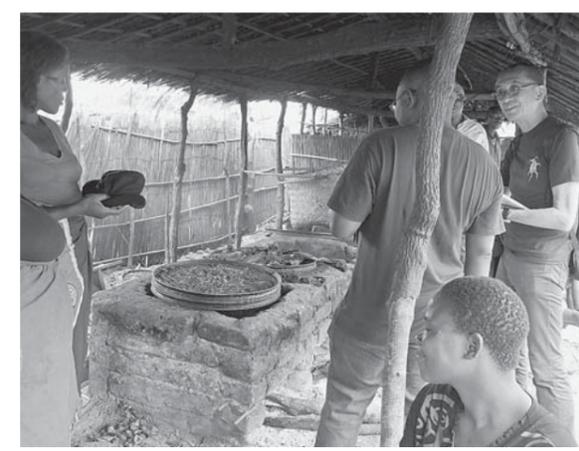
づくための知識を「地域環境知」と呼んでいます。科学知と在来知という古典的な二分法ではなく、両者がうまく混じり合い、相互作用と相互学習が起こる中で生まれてくる知識です。例えば農業者、漁業者の知識や、企業、NPOが生産する知識がまじりあって、地域環境知が出来上がる。そのとき、大学の専門家や、ある程度専門知識を備えた学生は、全体を見通す役割を持っているのではないかと思います。

このとき重要なのは、知識体系を相互に流通させるようなトランスレーターの役割です。これが二つ目のポイントです。いろいろな知識が渦巻いているとき、お互いに分かり合えないということが普通に起こります。もう一つよく起こるのは、科学的には正しいという知識が地域に入っていない場合です。例えば、カカオ豆はこうして発酵させれば、これだけの経済的価値がありうる、といった科学的知識は、そのままでは使えない。発酵をその地域にあったやり方にするにはどうしたらいいのか。そのためには別の知識が加わり、変わっていくかと思えない。それをやるのがトランスレーター、翻訳者です。

科学的知識を専門家ではない人が活用できるように再整理する。逆に、たとえば、農業者が培ってきた、微妙なさじ加減を含む栽培のための知識を他の人に分かるように伝える。外からの知識を地域に持ち込むだけでなく、地域の知識を外に向かって発信できるように双方向の仕組みが重要なのです。「地域環境知」を生産するトランスレーターとしての役割を、SUIJIIプログラムに参加する学生は担い得ると思えます。

今後は、曽根原さんや吉野さんのお話にあったように、企業など他の主体が加わり得るでしょう。そのほうが絶対に面白いし楽しい。そのために、カリキュラムの中に学生がトランスレーターの機能を身につけるような仕組みを埋め込む必要があるように思えます。

最後に、三つ目のポイントとして、教員の研究活動にきちんとフィードバックする必要性をあげておきます。地域との関わりは教員にとっても大変刺激的なものです。様々な視野の拡大を促してくれます。それが革新的な研究の創発につながります。これから大学と地域が一体となって、こういった点をぜひしっかりと考えながら、ダイナミックな取り組みを継続させ進化させていただきたいと思えます。



東アフリカ・マラウイ湖国立公園（世界自然遺産）に位置する漁村の燻製水産加工業に関する調査



大学経営・ 組織運営の 視点から

筑波大学ビジネスサイエンス系
教授・大学研究センター長
吉武 博通 氏

今から17年前の大学審議会、現在の中央教育審議会の答申をご覧いただくと、そこには学部教育の再構築、高大接続、そして国際舞台で活躍する今で言うところのグローバル人材、FD（フアカルティ・ディベロップメント）、成績評価基準の明示、秋入学という文言が書かれています。さらに、学長を中心とする全学的な運営体勢の整備、これは今風に言うとガバナンスということ書かれています。つまり、大学審議会や中央教育審議会、教育再生実行会議などいわゆる中央で議論されている国の政策はこの17年間、言葉遊びをしてきたということになります。東京で、大学研究センター長という仕事をして、大学改革の話をしていると、常にこのよう

な言葉遊びの中で自分が泳いでいることが分かります。ところが、仕事で各地の大学にお邪魔すると、各地の大学では私たちが考えている以上のことを実行されています。今回のSUIJIも、昨年から評価委員をさせていただいていますが、来るたびに感動して、すごく得ることがたくさんあり、満足して帰ります。

東京や中央に近いところにいますと、大学はずっと何も変わってないと、改革をしなければいけないのではないかと、経済界や財務省からも圧力がかかってきます。文部科学省はそれを必死に耐えているのですが、耐えきれなくてこういう答申を出して、大学に対してプレッシャーをかけてくる。そしてそ

の言葉は入れ替わり立ち替わりで、言っていることの本質は変わっていないことです。これは、大学は変わらなくていいと言っているわけではなくて、変わらないといけないところは多々あるのですが、私たちが行ってきたこと、培ってきたことで大学を生かせるものがいくつもあるわけです。そういったものを発信していく力が大学にはなかったのかなと考えています。そして、社会に大学の存在意義を知らしめる力が全く足りなかったのかなということを感じます。

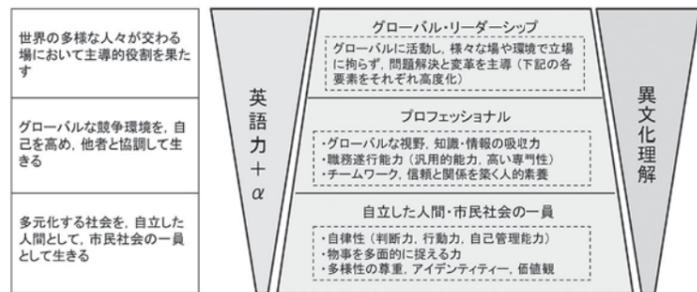
グローバル社会に相応しい人材に求められる要素についてですが、世の中は必ずしもグローバル化だけではありません。ローカライゼーションも進みます。アジアとか東アジアという単位で、リージョナリズムも起こります。あるいは民族や宗教による争いも起こります。つまり、グローバル化するのを経済、市場であって、社会は非常に多元化すると思います。そうすると、信じられるのは誰かというときに、やはり自らを信じていく、自立が非常に大切になります。3月31日に卒業させて4月に社会に出ていけば、明日から自分の力でお金を稼がないといけません。グローバルな視野で知識・情報を吸収し、職務を遂行する能力を持ったプロフェッショナルという要素と、自立した人間・市民社会の一員という要素をもちあわせた人材育成だけは、どの大学も逃れることはできません。且つ、そのプロフェッショナルになるためには、グローバルな視野を持って地域で活躍するという、まさにSUIJIのコンセプトはとても大事なことです。その上で、本



～グローバルに活躍するサバント・リーダーの育成を目指して～

「グローバル人材」考～グローバル化が進む社会において求められるもの

＜グローバル社会に相応しい人材に求められる要素＞



吉武博通「グローバル化という現実を大学改革を加速させる推進力にできるか」『カレッジマネジメント』180/May.-Jun.2013 より

に多国籍な環境の中で、仕事をしていく人間。これを私はグローバル・リーダーシップと呼んでいます。様々な大学で、各々の大学の環境で自分分はリーダーシップを発揮したいという学生たちが生まれてくると思います。それぞれの大学が学生たちを支援し、押し上げていくという枠組みが必要なのではないかと思えます。ですから、グローバル化ということで外国人教員を増やして英語で授業すればいいということではなく、グローバルをこのように理解してみたらいいのではないかと考えています。

今からの大学は、自らの大学の社会的存在価値を高める必要があります。日本には781大学がありますが、国立86、公立86、残りが私立ということですが、それぞれの大学が自分たちの社会的存在価値をどのように自ら再確認して、学内外に発信するのか、そして、支持を集められるかが問われます。そこで、やはり大学のブランドは大事です。ブランドとは、社会的交渉力・無言の交渉力であり、誰も持っていないものを大事に育て、組織文化として定着させることだそう。先ほどの佐藤先生のお話ですが、息長く続けることも大切です。ぜひこのプログラム、SUIJIで培ったものを愛媛大学の文化として、あるいは愛媛県、さらにこのプログラムは3大学ですから四国の一つの文化としてそれぞれ定着させてください。そして地域に根付かせてください。

愛媛大学の学生さんの中におられると思いますが、私たちが大学研究の立場から見ると、愛媛大学は非常に評価の高い大学であり、様々な取り組みをしています。これは学長のリーダーシップ、あるいは教職員のみなさんの力だと思えます。そういう評価のある大学ですので、ぜひ、この大学で学ぶことに誇りを持っていただきたいと思えます。私は、大学の教員には、知識への絶えざる情熱を持ち続けて欲しいと思っています。職員には、オラが大学を引っ張って行くという当事者意識を持ってもらいたい。学生も教員も職員も、面白さを知る力を大切にすべきだと思います。今日、社会起業家といわれるお二人の素晴らしいお話をうかがいまして、やはり飽くなき興味、関心、好奇心を養えるのは大学しかない

と改めて思いました。私は学生たちに向けて、「君たちは社会を生き抜く力なんていうそんなたくましいものは身につけなくてもいいよ。毎日一つでもいいから面白かったと思えるものがあれば、必ず前に進める。仕事だって、ビジネスの世界はつまらない、ストレスのたまる仕事ばかりなんだ。しかし、その中に一つでも面白さがあれば生きていける」と伝えていきます。このことは、教員、職員であっても共通して言えることです。このプログラムの中には面白さがたくさんあると思います。ですから、補助金が切れても、金の切れ目が縁の切れ目ではなく、ぜひ持続させていただきたい。これを長く文化としてとどめてほしいと思います。



南加記念ホール



パネルディスカッション

◎菊川 愛理さん

「今日の発見！サービスマーケティングとは？」

私達が地域に入って活動していることを、パネリストの方々に専門的・学術的に見ていただくと、佐藤哲先生がおっしゃった、地域に滞在しながら地域の問題解決などを目指す「レジデント型研究」というものに近いものなのだと思つかせていただき驚きました。

◎島上 宗子

「地域とともにつくるプログラム」

このプログラムは、大学のカリキュラムでありながら、地域の方につくっていただいているなど実感しています。学生も、地域での体験を真摯に受け止めて、私たちが期待している以上のことを学びとってくれているというのを改めて感じました。大学はプログラムを押しつけるのではなく、地域・学生と共に実態にそって柔軟に変容させていくという姿勢で継続していくことが必要だと思います。

◎吉野 慶一氏

「自らまなぶ機会を自ら生かす」

学生は、SUIJIIプログラムに申し込んだ後、全て言われた通りに活動するというよりは、現地に入って自分が感じたことをフィードバックしながら、日本人だけでなくインドネシアの学生と一緒に考え、ステークホルダーとして関わりのあるすべて

の人といっしょに考えないといけないと思います。ただ参加しただけでもつたない結果になってしまうのか、今後にもすこく生かせる結果になるのかは、自分次第だと強く感じます。

◎木崎 真近氏

「地域から大学・学生に期待すること」

せっかく地域に来ていただくのですから、学生には全てをさらけ出して地域に飛び込んで欲しいです。SUIJIIの学生たちは、地域のお年寄りにとっては孫のような存在、小さい子どもたちにとってはお兄ちゃんお姉ちゃん、農家さんにとっては貴重な担い手です。SUIJIIの受け入れには国県事業執行時のような事業疲れ感覚は地域に全くなく、逆にリラックスして受け入れられています。

◎曾根原 久司氏

「企業との連携を引き出すために」

楽しく小さいモデルの仕掛けをして、それを効果的にアピールし、次の活動をどう生むかということだと思います。参画する企業目的として一番多いのは研修目的です。高度経済成長期は、責任感とミッションで頑張るぞと人は動いていた。でも今は、責任感+遊び心。開墾という、荒地からお米が生まれることの無から有をつくりだすまでの過程を経験することが大切です。

◎吉武 博通氏

「企業と連携する大学の姿勢」

大学は様々な教育改革を行っていますが、実践している人たちの改革になってしまいがちです。そこで、組織が関わってみて面白いと思ってもらった状況をつくりながらそれを広げていくことだと思います。そのために大事なことは、やはりストーリーなんです。教育改革もいろんな取り組みもそこに物語があり、そこをしつこく語っていきながら、企業の考え方とつなげていくことが大事です。

◎佐藤 哲氏

「地域との信頼関係を保ち続ける」

SUIJII自体、大学だけでやってきたということとは全然なく、地域が受け入れてくださり一緒にやって動いてくださったから、今、この段階になって、一種の物語（ストーリー）が出来つつあります。そういう物語がこれからも積み重なっていきます。大学と学生が地域と一緒に何らかのアクションを一緒に起こしているときに、我々が忘れがちなのは、実は物語が止まった時点で、すでに我々は地域のステークホルダーであるということなのです。一回しか来ない学生であることが、その地域のメンバーとして、その地域で何らかの役割を担っているはずなのです。そのステークホルダーとしての役割がある程度発揮されていく中で、信頼が生まれ、相互に学び合う関係ができていく。ステークホルダーとして地域に受け入れら

れ、信頼されていくためには、当然一種の責任が発生します。その責任の重要なコンポーネントは、長く関われるかどうかだと思います。地域との信頼関係をづくり、出来上がった信頼を崩さない、裏切らないという相互の関係をどのように長期にわたって維持していくか。一つは当然ながら大学が総力をあげてバックアップしながら実行していくこと。そう簡単にやめないぞという覚悟で続けること。これはビジネス展開をしてらっしゃる曾根原さん、吉野さんに言わせたら当たり前のことですが、そう簡単に自分たちの指導する学生を含めて、何らかの関わりを維持するような具体的なアイデアを持って、それぞれ内発的にいろいろな関わりを持つということが大事なんじゃないかと思えます。SUIJIIのプログラム以外で、SUIJIIが入っている地域に別の研究室も入ってくるというようなダイナミックな形で、大学の中でSUIJIIの地域との様々な関わりが進化していくプロセスが今後非常に重要になるのではないかと感じておりました。最終的には誰に評価されていくかというと、文部科学省の評価は大事ですが、それ以上に、やはり一緒に仕事をしている地域の方々が評価してくださるという双方向性がたいせつだと思います。10年後、20年後に「あのSUIJIIっっちゃうやつがあつてよかったよね」と言ってもらえるものにならないといけないということとをみなさん本気で考えていただいて、続けていただくのが大事だと思います。

SUIJIのあゆみ

平成23年3月	「熱帯農業に関するSUIJI（Six University Initiative Japan Indonesia）コンソーシアム協定書」締結により、愛媛大学・香川大学・高知大学およびインドネシア共和国のガジャマダ大学・ボゴール農業大学・ハサヌディン大学によるSUIJIコンソーシアム設立
平成23年7月	愛媛大学にて第1回SUIJIセミナー開催
平成23年9月	修士課程学生を対象とした「SUIJIジョイント・ディグリー・プログラム（SUIJIJD）覚書」締結
平成24年7月	ボゴール農業大学にて第2回SUIJIセミナー開催
平成24年10月	文部科学省「大学の世界展開力強化事業」ASEAN諸国等との大学間交流形成支援」に採択
平成25年3月	愛媛大学にて修士課程学生を対象としたSUIJIJDにてインドネシア学生5名の受入れを開始
平成25年4月	第1回外部評価委員会を開催
平成25年8月	SUIJIサーバント・リーダー養成に関する科目群の開講 修士課程を対象としたSUIJIJDにて日本3大学より合計8名の派遣を開始
平成25年8月	高知大学にて第3回SUIJIセミナー開催
平成25年9月	学士課程学生を対象とした「SUIJIサービスマーケティング・プログラム（SUIJISLP）覚書」締結
平成25年12月	四国の農山漁村5箇所にて、学士課程学生を対象としたSUIJISLPの初めての国内サービスマーケティングを実施
平成26年2月3月	セミナー「国際交流に貢献する人材の育成をめざして」を開催
平成26年2月3月	第2回外部評価委員会を開催
平成26年3月	インドネシアの農山漁村5箇所にて、学士課程学生を対象としたSUIJISLPの初めての海外サービスマーケティングを実施
平成26年3月	修士課程学生を対象としたSUIJIJDにてインドネシア学生6名の受入れを開始
平成26年8月	修士課程を対象としたSUIJIJDにて日本3大学より合計5名の派遣を開始
平成26年8月	四国の農山漁村8箇所にて、学士課程学生を対象としたSUIJISLPの2回目の国内サービスマーケティングを実施
平成26年9月	ハサヌディン大学にて第4回SUIJIセミナー開催
平成27年1月	博士課程学生を対象とした「SUIJIジョイントディグリー・ドクター・プログラム（SUIJIJDPC）覚書」締結
平成27年1月	公開セミナー「地域から未来をつくる人をつくる」を開催
平成27年1月	第3回外部評価委員会を開催
平成27年2月3月	インドネシアの農山漁村5箇所にて、学士課程学生を対象としたSUIJISLPの2回目の海外サービスマーケティングを実施
平成27年3月	修士課程学生を対象としたSUIJIJDにてインドネシア学生12名の受入れを開始



第4回SUIJIセミナーにて 写真左から、ボゴール農業大学長、愛媛大学長、香川大学長、ハサヌディン大学長、高知大学長、ガジャマダ大学長

